「困った!」ではなく「やってみたい」を大切に
～まちの担い手が育つコミュニティカフェを目指して～

大塚 朋子
（コミュニティ福祉学科2003年卒業）

はじめに

私は現在、横浜市戸塚区にある「こまちぷらす」というNPO法人で働いています。私たちの運営する「こまちカフェ」という場において、コミュニティカフェに訪れる方々が、カフェという居場所での活動や経験を通して、地域課題を解決する“まちの担い手”となるような仕掛けに取り組んでいます。それを担う「居場所づくりコーディネーター」の１人として、さまざまなチャレンジをする中で見えてきたことをこの機会をお借りして振り返り、紹介させていただきます。

現在、地域福祉の分野等を経て、「担い手の育成」に取り組んでいる卒業生の皆さんや、コミ福卒業後に結婚や出産を経て福祉職としての働き方を模索している皆さんにとって、何かのヒントや、今後一緒に考えるきっかけに少しでもなれたら幸いです。

１．コミ福卒業後

大学卒業後は、在学中の実習先での体験に魅せられて、知的障がい者の通所更生施設（当時）で働きました。本人の望みや喜びや幸せは何か、本人の力や強みが活かされる生活、関わりとは何かを日々考え、手ごたえも無力感もある３年間でした。多くを学んだとても楽しい仕事でした。

一方で、ある種の危機感のようなものも感じていました。それは、「自分たち支援する人間の存在が、障がいのある人と外の世界や地域との接点をかえって奪っていないか？」ということでした。目の前にいる人の幸せを考えつつ、「この人たちがこの町に暮らしていること」をもっと風通しよく見えるようにすることも、支援者の役割なのでは…と。それが当時の自分にはできなかった気持ちもあり、地域の側からできることをしてみたいと思い、施設を退職後、横浜市の地域ケアプラザに就職しました。

地域ケアプラザでは、「地域活動交流コーディネーター」と「地域包括支援センターの社会福祉士」として働きました。日々地域に住む方々の相談や困りごとが入ってくる中で、制度やサービスでは解決できない部分を地域住民の力で補うべく、ボランティアの確保や育成も役割の１つでした。高齢化率の高い地域だったこともあり、自分たちの後を任せる人のいない不安感や負担感を抱えながら活動するボランティアさんを沢山見てきました。「子育て中のお母さん達にどう担い手になってもらうか？」も大きな課題の１つだったことも覚えています。

そんな中でも、町内会がどういう風に回り、地域の活動が成り立ち、どんな方々がどんな思いで動いているのか、そしてそのまちに住む様々な方の様々な生活と、小さなエリアでじっくりと向き合わせてもらった時間でした。前職で抱いた思いとつながるものも含め、ささやかな取り組みながら、「こんな人いたら…」「こんな場所あったら…」をひとつひとつ実現するべく、小さな積み重ねを地域の方々とした５年間でした。

２．出産を機に退職後、「客」として出会ったNPO法人

前述した通り、コミ福卒業後は一度の転職を挟みながらフルタイムで「福祉職」として働いてきましたが、その後出産を機に退職し専業主婦になりました。自分が子どもとゆっくり過ごしてみたくて仕事をやめたものの、「参加者」として様々な親子教室や親子サロンに参加するだけでは、何か物足りない気持ちがありました。地域ケアプラザでの仕事を通して知ってしまった「自分の知らないところで地域のために動いている人がたくさんいる」ということと地域活動の魅力が、私も「この町で子育てをする一市民として何かしたい」という気持ちにさせていました。

そんな中、「お母さんが立ち上げた親子カフェ」の存在を知り、友人親子と子連れでランチに行きました。そこで見たのは、自分と同じように子育て真っ最中のお母さん達が子どもをおんぶしていきいきと働いている姿でした。その様子に衝撃を受けたと同時に、「私も何かしたい」気持ちがくすぐられたのを覚えています。

そのカフェは、現在の店舗の前身の「こまちカフェ」でした。まだ２歳前の娘をつれて数カ月ボランティアをした縁で、現在スタッフとして働いています。

３．こまちぷらすの活動内容

「子育てをまちでぷらすに」をスローガンに、孤立した子育てをなくし、さらには「まちの力で子育てが豊かになる社会を目指して」活動している団体です。団体設立当初から行っているカフェという「居場所」では、ふらっと寄れる飲食

店としてのカフェと共に、様々な「当事者」であるお母さん達による活動やイベントも実施しています。発達障害のあるお子さんの親が作った会や、不登校や引きこもりの子をもつ親のためのおしゃべり会、ダブルケアの方を中心に介護について語る会などがそれにあたります。

子育てで孤立しない社会を考えた時、ご家族の介護をされていたり、障がいのあるお子さんを育てていたり、自身が障がいを持っている方にとっても、孤立に陥りやすいことや、それを防ぐために必要なことで共通していることも多く、そんな様々な方どうしが、集まって経験や思いを話し合い、時に発信できるような場を学びあいながら実施しています。

その他にも、「赤ちゃんの誕生をまち全体で祝福する」文化を多様な立場の方と作っていくことを目的とした「ウェルカムベビープロジェクト」や、この後詳しく述べる「地域の居場所づくりと参加のデザイン」に取り組む「つながりデザインプロジェクト」等、カフェの中にとどまらず、そこを拠点としてまち全体の多様な方々との協働で作る事業も展開しています。

4．コミュニティカフェにおける「担い手の育つ場」のコーディネート

さて、本題の「担い手が育つ場」のコーディネートについてです。この取り組みは、カフェという「日常」の場から、ゆるやかに自身の「やってみたい」が育ち、その先で「誰かの声や困りごと」「かつての自分が欲しかったもの」などとの掛け算を経て、「まちの担い手」になっていくことを目指しています。

社会福祉協議会や地域ケアプラザのボランティア登録には、ある程度「ボランティア活動がしたい」「○○でお手伝いをしたい」といった意思がすでにある人が登録をすることが多いと思います。もちろん、もっと手前の部分からの関心を育てるような講座の実施や、ご本人の意識の度合いに寄り添ってコーディネートをされているところもあるかとは思いますが、少なくとも自分の経験では、「ボランティア募集」の情報発信も常に行い、きっかけとなるようなイベントや講座も実施していたものの、やはり登録の敷居は決して低くはなかったと感じています。福祉施設としての場のしつらえや、「利用者」「相談者」「ボランティア希望者」としての「立場」でもって足を運ぶ場になってしまう面があるからです。

一方カフェには、それまでボランティア活動や地域を全く意識したことのない方もランチの利用に訪れます。ただ「客」として、何度かランチやイベントに足を運ぶ中で、「自分もここで何かできることあるかな…」と思うところから一緒に歩みます。

ここで大切にしているのは、「地域の課題」「担い手不足」のために、担い手を

集めることや育てることではなく、本人の「やってみたい」「あったらいいな」の気持ちを大切に本人主体での活動ができるようなコーディネートです。活動する本人の、その人らしい多様な活動が増えることで、結果的にそれらがフォーマルサービスを補うことにもつながり、「まちの担い手」としての活動になりうると考えています。

5．どんな人が登録し、どんな活動が生まれているのか

こまちカフェでは、2016年10月より、一般的なボランティア登録制度である「こまちパートナー登録制度」を実施しています。どんな方々が登録されているかというと、子育て世代が大半をしめるのですが、登録時のアンケートの結果を見ると、2016年10月―2018年２月末までに登録した103名のうち、具体的にやりたいことがあった人は12人、漠然としたやりたいことがあったのは34人、残り57名の半数以上の方が「やりたい」はない状態で登録していることがわかります。そして、登録の動機についての回答から、「子育てしながらも何か社会とつながりたい」という思いの方が多く、「新たな出会い」や「視野の広がり」を得る事や、「やりたいこと」「自分にできること」を探すために登録している方が多くいることがわかりました。

では、そのような状態で登録した方が、どうやって「自分のやりたいことで活動する担い手」になっていくのでしょうか。ここまで取り組んできてわかったことは、そのためにはまず、

・その人自身が安心や居場所を得ること
・自分の思いを語ることや誰かと共有することで自己肯定感を得ること
・横のつながりを得て共に磨きあう仲間ができること
・視野が広がる機会があること
・活動に向けての背中を押す人の存在があること

など、様々なことが大切であり、時に不可欠であることがわかりました。

そのような機会や仲間を経て、ある人は、自身の発達障害について皆の前で自ら公表し、発達障害のあるお子さんのお母さんと組んでグレーゾーンで悩むお母さん達のための勉強会を立ち上げ、また、不登校の子をもつお母さんによる、不登校、ひきこもりの子をもつ親のための会も立ちあがるなど、それぞれ自身の経験や思いと深くかかわる活動も多く生まれています。そのようにして動き出す皆さんの姿から私が教わったのは、課題感や使命感だけではなく、「自分がやりたい」「自分にとっても必要」という思いがそこにあることの力でした。

6.「この人たちのため」ではなく「この人たちやあの人たちと一緒に」

最後に、今の仕事やここ数年の自分の体験も通して思うことを書かせていただきます。

出産前に仕事をしていた時と違うことは、私自身が「子育て当事者」になったことでした。子どもを授かり産み育てる中で、うまくいかないことも、つぶされそうなくらい不安になる思いもしてきました。そしてもう１つ、父親が要介護状態になり「要介護者の家族」という立場にもなりました。仕事で多少関わっていた領域とはいえ、我が事となると娘としての感情と分けられない葛藤や、実際に経験してみないとわからない大変さもありました。

当事者の気持ちも100人いれば100通りではありますが、自分自身が戸惑ったことやその存在に救われたものがあるからこそ、「知る機会」「話せる機会」「受け止めあえる相手」の大切さを改めて感じています。

そんなことからも今思うのは、私が今の立場でできることは、「専門職として」「援助者として」相談にのることや支援を考えるのではなく、「このまちに住む当事者の１人として」、自分と同じような不安やモヤモヤを抱える人どうしが出会って話せる場を増やしていくことだということです。また、立場の違う人どうしの接点を増やしていくことに力を注いでいきたいと思っています。接点が増えることで、進む理解も沢山あり、違いを認めあえる社会にもつながると思うからです。「誰かのための特別な支援」ではなく、「いろんな人と出会って一緒に考える場」を地域に増やしていきたいと思っています。

そして、福祉を学び福祉の仕事をしてきた１人として、地域の動き、支援を必要とする人たちの抱える課題や現実について知ろうとすることも忘れずにいたいと思っています。障がいと高齢分野での仕事で出会った、忘れられない人、言葉、場面、感情は沢山で、私にとっては今でも多くを教えてくれる財産です。そんな風に思い浮かぶ方々の存在と共に、一緒に生きていくこと、つながっていくことを心がけて、これから「一市民としての私なりのソーシャルワーク」をしていきたいです。